

2017(平成29)年度社会領域専攻 新入生合宿研修の設計と実践

ー相楽郡精華町および笠置町、木津川市をフィールドとしてー
香川貴志*¹・斉藤恵太*¹

Design and Practice of Freshman Camp for the Students of Social Studies
in 2017: Excursion Around Seika Town, Kasagi Town and Kizugawa City

Takashi KAGAWA and Keita SAITO

抄 録：本稿は、京都教育大学が新入生を対象として毎年開催している新入生合宿研修について、2017(平成29)年度における社会領域専攻の事例をまとめたものである。学部新入生を対象にしているとはいえ、実施時期が5月中旬から6月中旬にかけての週末に1泊2日で行うことになっているため、既に専攻内での相互理解や親睦は相応に進んでいることが予想され、親睦を第一義に考えた合宿研修は必ずしも適切ではないと思われる。そこで、「学びを深めるための動機付け」と「教員になる意欲の向上」を盛り込んだ合宿研修を周到に設計し、その実践を図った。改善を施す余地は残っているが、京都教育大学の立地環境を考えれば、現時点では上質な新入生合宿研修が実施できたと考えている。

キーワード：新入生合宿研修、国立国会図書館関西館、宇治茶、公立学校訪問、精華町、笠置町、木津川市

I. はじめにー新入生合宿研修の意義ー

大学における高等教育がそれまでの学校教育と大きく異なる点として、学生の出身地が広範かつ多様なこと、自宅通学と自宅外通学との別を問わず自立心や自律心が従前以上に高い水準で求められることなどを指摘できる。大学入学を果たして間もない学生は、このような環境変化によって少なからずストレスを受けかねない。一見して楽しく学生生活を送れているようでも自身の居場所を上手く見出せない学生もいるだろう。学生が少しでも勉学に励みやすい環境を整えるには、集団内での人間関係の醸成に加えて、勉学への適切な動機付けが不可欠である。文部科学省が新入生合宿研修を奨励し、本学を含む全国各地の大学でそれが実施されているのも、一言でいえば上記の環境整備を図ることに他ならない。

そこで、いくつかの大学における新入生合宿研修を論文等の記録から探ってみると、本稿の著者の一人がまとめた著作(香川・荻野:2012)で触れていないものに限っても、ここ数年で文献欄に列挙した6本を数える。これは国立情報学研究所の論文検索システムCiNiiにおいて「新入生合宿研修」という索引語で検索してリストアップされた論考のうち、メモ的なものを除いて集計した数である。したがって、例えば「新入生研修旅行」や「新入生宿泊研修」などで検索すれば、同様の内容を持つ論考がもう少しヒットするかもしれない。

*¹ 京都教育大学教育学部

ところで、上記の論考を精査すると、新入生合宿研修の実施をめぐっての課題が浮かび上がってくる。すなわちそれは、実施時期と実施規模に応じて新入生合宿研修の目的や内容を調整しなければならないという極めて予想しやすい課題である。

まず実施時期に関しては、上記の6例のうち論文に実施時期が明記されていない福井大学工学部の事例（鈴木：2009）を除けば、入学直後に実施する機関が宇部工業高等専門学校（福政：2012）と東洋食品工業短期大学（松永：2013）の2校、入学から1~2か月後に実施している機関が琉球大学教育学部（仲間ほか：2010）と帝京大学教育学部初等教育学科（山村・成家：2013）および阿南工業高等専門学校（小松ほか：2014）の3校である。入学直後の場合は、新入生相互の面識が深くならない段階であるため、新入生合宿研修は親睦や相互理解を中心としたものが効果的であると思われる。ただ、入学直後の合宿研修であっても、宇部工業高等専門学校では学力テストを実施して「学ぶための動機づけ」を鮮明に打ち出しており、東洋食品工業短期大学では専門分野を強く意識した「火起こしから始める自炊体験」という内容が盛り込まれている。

他方、入学1~2か月後に合宿研修を実施する各校では、対象人数が新入生172名を数える帝京大学教育学部において学生間の相互理解の深化を重視する合宿研修が行われ、教育効果についての様々な検証が行われているのに対し、実施規模が相対的に小さい琉球大学教育学部では沖縄の特色を活かした平和学習が実施され、阿南工業高等専門学校の合宿研修では南海トラフ変動にともなう災害発生時における危機管理意識の醸成に力点を置いた設計がなされている。琉球大学と阿南高専における「地域の特色を十二分に活用した計画立案」は、同じ時期に新入生合宿研修を実施している京都教育大学でも大いに参考にすべきであろう。入学後1~2か月を経た段階で「相互に親睦を図りましょう」といわれても「今さら何を・・・」と感じる学生は少なからず居ようし、新しい生活環境に対する感覚が瑞々しいうちに「地域の特色や魅力」を実感させるには合宿研修が絶好の契機となるからである。

Ⅱ．コース設計とその狙い

コース設計に先立って、大学から提示された新入生合宿研修の3つの日程（いずれも5月中旬～6月中旬の土日）から1つを選んだ。その際、担当教員2名のスケジュールを調整して、実施日程を5月27～28日に定めた。社会領域専攻では2017（平成29）年度時点で総勢12名の教員が在籍しており、毎年2名の教員が順次1回生の担任を務め、新入生合宿研修の引率業務にもあたっている。新入生合宿研修の運営は2名の担任に任されているので、日程調整、コース設計、宿舎の確保、研修実施までのすべてを担当が行う。ただし、借上げバスで移動する際のバス会社との折衝は担任から依頼を受けた学生課が所掌する。

今回は、前章で述べた「地域の特色を十二分に活用した計画立案」の実現のため、2月上旬に日程調整を済ませ、その直後にコースの概略を設計し、それに適合する宿舎を模索して2月中旬に宿泊先を確保した。宿舎は京都府相楽郡笠置町内の笠置山頂近くにある旅館を予約した。ただ、この段階では前期日程入試さえ終わっておらず、予約人数は「引率教員を含めて約40名」と告げての予約となった。総人数や男女比が分からない中での宿舎予約は極めて難しいが、旅館の場合

は部屋ごとの人数調整が容易なため、このようなケースでは柔軟性が高く重宝する。

今回のコースに盛り込んだ企画(施設見学およびアクティビティ)とその狙いを整理すると次の通りである。これらは当初から計画していた事項を順に並べたものであるが、関係各所からのご厚意によりすべてを実現することができた。なお、以下の①～⑧(当初は企画に無かった④は欠番)は、次章の各節内の①～⑧に対応する。

- ① 国立国会図書館関西館(相楽郡精華町): 学習に必要な資料検索と資料収集の方法を知る。
- ② 福寿園 CHA 遊学パーク(木津川市): 宇治茶の歴史や文化に触れて京都の特産品を理解する。
- ③ 笠置小学校(相楽郡笠置町): 過疎地域の小規模小学校の実情を見聞する。
- ⑤ 宿舍でのご当地クイズ(相楽郡笠置町): 同学年・同専攻の仲間との相互理解を深める。
- ⑥ 笠置寺(相楽郡笠置町): 笠置を象徴する信仰と観光のシンボルの現状を見聞する。
- ⑦ 浄瑠璃寺(木津川市): 南山城の名刹で国宝や重要文化財を間近に観る。
- ⑧ 木津南中学校(木津川市): 人口増加地域の大規模中学校の実情を見聞する。

これら各々で最も重視した狙いは3種に分けられる。第一は「教員を目指して教育学部で学ぶための基盤づくり」であり、上記の①, ③, ⑧が該当する。第二は「京都の文化や地域色への理解を深める」で、上記の②, ⑥, ⑦に加えて上では欠番になっている④があてはまる。第三は新入生合宿研修では欠かせない「学生相互間および学生・教員間の親睦」であり、上記の⑤が挙げられる。

大学と現地との往復を含む訪問施設間の移動は、徒歩や宿泊先の送迎バスなどの一部を除いて借上げ大型バスを利用した。社会領域専攻の場合、例年の新入生が35~40名の間に収まるので、引率教員2名を加えても45人定員の大型バスは最も費用対効果が高い。

後期日程入試の合格発表を終えて2017(平成29)年度 of 社会領域専攻の新入生は、男子27名と女子10名の総勢37名に落ち着いた。年度替わりで多忙を極めている学校(上記③と⑧)を除いて訪問先の同意を得ていたのも、新年度早々に男女別の正確な人数を訪問先へ順次連絡した。また、新年度の諸行事が落ち着くころを見計らって、訪問予定先の2つの学校に訪問希望やその内容、訪問者数を伝え、それ以後は必要に応じて連絡を取り合った。

ところで、著者の一人の香川は、京都府・笠置町・京都教育大学が協働実施している「1まち1キャンパス事業」という取組に参加している。その研究会が2月末に1泊2日で笠置町内において実施され、同じ宿舍を新入生が合宿研修でも使うことにしていたため、研究会の折に宿舍と綿密な打ち合わせができた。さらに3月26日には「1まち1キャンパス事業」の一環として、笠置町を舞台にした映画『笠置 Rock!』の町民向け試写会に招待していただいた。この映画が笠置を取り巻く環境の理解に役立つことが分かったため、上述した2つの学校との調整と並行して『笠置 Rock!』の劇場公開前の特別上映をしていただけるよう笠置町役場と交渉を始めた。関係者のご厚意により新入生合宿研修の直前に上映許可が得られたので、映画鑑賞を企画に盛り込んだ。これが上で欠番になっていた、④映画『笠置 Rock!』特別上映会である。その狙いは既述の「京都の文化や地域色への理解を深める」に含められる。

このような事前準備を経て、社会領域専攻の新入生合宿研修は好天のもと実施日を迎えた。その骨子を次章でコース上の企画順にまとめることとする。

Ⅲ. 新入生合宿研修の実施とその内容

1. 第1日目（5月27日（土）、晴れ）

合宿研修当日の朝、体調不良で欠席を申し出る男子学生1名からの電話が香川研究室に届いた。その結果、参加者は男子学生26名、女子学生10名、引率教員2名の総勢38名となった。最初の訪問先である国立国会図書館関西館への入館予定時刻が10:00であったため、集合時間は藤森キャンパス掲示板前に8:45、大学出発を9:00として、数日前にリマインドメールを新入生に送った。ごくわずかな遅刻者を合流させ、大学を定刻より早い8:55に出発した。大学からは新堀川通り、第二京阪道路側道、京滋バイパス側道、国道24号線を経由し、城陽インターチェンジ（IC）から京奈和自動車道に入って精華学研ICから精華中央通りを西進して国立国会図書館関西館へは9:50に到着した。以下の本節では、企画順に前章に記した①～⑤の概要を述べる。

① 国立国会図書館関西館 入館して研修室に案内された。ここでは、まず予め送付しておいた住所確認書類をもとに作成された利用者証の交付があり、同書類が不備であった者に持参させた有効書類の提出を促した。当該学生には施設見学後に利用者証が渡された。国会図書館についてのレクチャー（写真1）を研修室で受けた後の施設見学では、利用者向け研究室、閲覧室、地下書庫を順に巡った。新入生には少し難しい内容が含まれていたかもしれないが、学生の反応を観察していると相応の感動を覚えたようである。「ネットワーク社会だからこそ、ネットワークでは閲覧できない文献や資料にどれだけ対峙したかで仕事や研究の質や価値が決まる」という説明は説得力に富み刺激的であった。フリーアクセスが叶わないと文献検索を諦めてしまう者が珍しくない時勢なので、この図書館見学が学びの良い契機となることを願わずにはいられない。

すべての見学を終えて退館したのは11:40であった。新年度早々におこなった事前交渉の結果、大型バスは国会図書館の駐車場で昼食の間も預かってもらうことができた。同館の近隣には大型ショッピングセンターや多数の飲食店があるので、退館後に一時解散のうえ昼食とした。昼食後は12:40にバスの前で再集合して次の訪問先である②福寿園CHA遊学パークに向かい、予定時刻の13:00に到着した。

② 福寿園CHA遊学パーク この施設は木津川市に本社を置く福寿園が運営する体験型産業博物館である。本来は平日のみの開館であるが、今回は特別に依頼して臨時開館してもらえた。ここでは有料企画の「石臼を使った抹茶づくり」（写真2）を体験した。石臼の使用方法の解説

に留まらず「茶の文化」を広範に、そして時には深く学べる説明は、後段でも記すように多くの受講生から好評を博した。時間的な制約により施設内のすべてを巡ることはできなかったが、茶文化に



写真1 国立国会図書館関西館でのレクチャー

国立国会図書館の機能、利用方法などについて説明を受けた。

（2017年5月27日、香川撮影）



写真2 石臼を使った抹茶づくり体験

石臼は非常に重く、抹茶づくりは体力と丁寧さの勝負！

（2017年5月27日、香川撮影）

関する展示を中心に充実した見学ができた。なお、施設の名称に盛り込まれている CHA は「ちゃ」ではなく「シー・エイチ・エー」と読む。当然ながら「茶」をイメージしているが Culture（文化）、Health（健康）、Amenity（快適）の頭文字から命名されたと知れば、見学・体験を経たのちに十分納得できる名称である。我々一行は、遊学パークを 14:40 に出発し、一般道と国道 163 号線を経由して、次の訪問先である③笠置小学校には 15:10 に到着した。笠置小学校の準備の利便に配慮して、遊学パークを発って 5 分後に電話連絡をしておいた。大型バスとは小学校の下笠置町役場前で別れ、不要な荷物は依頼していた宿泊先のワゴン車で先に運んでもらった。

③ **笠置小学校** 全国で 2 番目に人口が少ない「町」である笠置町（1,368 人、2015 年国勢調査）で唯一の小学校として機能する同校は、2017 年 3 月に 2 名の卒業生を送り出し、同年 4 月に 6 名の新入生を迎えた小規模校である。学校は町立ではなく相楽東部広域連合立であり、この組織名称からして小規模校運営の難しさが伝わってくる。再校時に近い 2018 年 2 月 2 日現在の児童数は 27 人を数える。しかし、現在も複式学級は無く、各学年 1 クラスの学校運営が維持されている。同校の教育方針は、学校行事や給食は全児童と一緒に参加・活動する、3 年生以降には学校をあげて落語に興じるなどを特徴にしている。こうした小規模校ゆえの工夫の説明をランチルームで受けてから校内を巡った。6 名の児童で構成される 1 年生の教室では机が緩やかな弧を描いて配置されており（写真 3）、ほのぼのとした雰囲気のもとで授業が展開されることになる。音楽室から木津川に架かる笠置大橋を眺めたのち、16:00 に同校を辞して徒歩で笠置大橋を渡り、笠置町の中心集落の各所で地理的な案内を施しながら、JR 笠置駅前の笠置産業振興会館に至った。到着時刻は当初の予定より若干遅れて 16:25 であった。

④ **映画『笠置 Rock!』特別上映会** 笠置町の地域振興の一環として制作されたボルダリング映画を笠置産業振興会館で鑑賞できた。これは、監督の馬杉雅喜氏、笠置町企画観光課の小林慶純氏からのご厚意によるものである。ボルダリングは道具を使わずに岩に挑む登攀競技の一種で、2020 年東京オリンピックの競技に採用されたスポーツクライミングの一領域（他の 2 領域はスピード、リードと呼ばれる）である。笠置町には国内有数のボルダリングスポットがあることから、それが映画の題材となった。ロッククライミングの催し「笠置 Rock!」をロックンロールのイベントと勘違いした主人公がボルダリングに没頭していくストーリーである。おおよそ 1,400 人の笠置町民のうち約 300 名がエキストラだけでなく多くの脇役で助演したという作品は町民の誇りにもなっている。同作品は、我々の訪問から約 1 か月後に「イオンシネマ高の原」で有料初公開され、初日と 2 日目には満員御礼を成し遂げた。なお、映画の上映に先立って、上述



写真3 学習机が緩やかな弧を描く笠置小学校1年生の教室
全校児童が家族のような同校らしいコマ。
(2017年5月27日、香川撮影)



写真4 『笠置 Rock!』上映前に説明を受ける学生たち
笠置町の概況、映画のコンセプトについての説明が得られた。
(2017年5月27日、香川撮影)



写真5 宿舎での夕食（BBQ）

野外でのBBQは夕陽が美しく、大変に盛り上がった。

（2017年5月27日、香川撮影）



写真6 ご当地クイズ答え合わせ前の様子

準備に多少手間取ったが、楽しみながら知識を増やし相互理解を深めた。

（2017年5月27日、香川撮影）

の小林氏から笠置町の概況の説明も得られた（写真4）。短い映画なので上映は17:30頃に終わったが、この時間に合わせて笠置山頂付近の宿舎「松本亭」にマイクロバスを配車してもらった。大きな荷物は笠置小学校の見学前に運搬を終えていたため、産

業会館と宿舎の往復は2回で済んだ。

⑤ 宿舎でのご当地クイズ 投宿後は後の時間配分を考えて、部屋割りを終えてすぐの18:30頃から夕食とした。メニューは野外でのバーベキューにしたが、日没が遅い季節なので途中までは照明無しでも十分に明るかった。今年度の新入生は早くも大学生活に馴染んでいる者が多いようで、バーベキューも大変に盛り上がった（写真5）。他に客がおらず貸切り状態だったのは幸運という他はない。約1時間で夕食を終えて19:30からレクリエーション企画をおこなった。今回の企画は新入生合宿研修の2日前までにメール送信で提出してもらった「ご当地クイズ」を香川がスライドに編集して『なるほど・ザ・JAPAN』という各学生の出身地にまつわる4者択一のクイズで正解を競った（写真6）。中には「ご当地」ではない出題もあったが、筆者である引率教員2名からの出題も組み込んで40題が出題された。ご当地クイズということもあり、各学生の故郷の地理的・歴史的・文化的な相互理解が深まり、企画としては大成功だったと自己評価できる。ただし、時間的な制約があったため、スライドの作製には相当に骨が折れた。優勝には24題を正解した3名の学生が並び、優勝者には菓子袋（おかき詰め合わせ）をプレゼントした。同率優勝が3名出ることは予想していなかったが、優勝者へのプレゼントとして予め購入していた菓子袋が3袋セットだったことが幸いした。商品を菓子袋にしたのは、部屋で食べながら話ができるようにという配慮である。

2. 第2日目（5月28日（日）、晴れ）

新入生の大半が未成年ということもあり、当然ながら禁酒であったため、7:00からの朝食に遅刻した者は数名を数えただけであった。遅刻者も5分程度の遅れに収まり、その後の予定を変更するには及ばなかった。朝食のあと荷物整理を終え、それを宿舎に預かってもらい、指呼の位置にある笠置寺に徒歩で移動した。以下の本節では⑥～⑧の概要をまとめる。

⑥ 笠置寺 境内には8:00に入った。この季節の笠置寺は寒く感じられるほどの涼しさだった。住職が檀家へ出掛けているとのことで、長老（先代住職）から笠置山や笠置寺の説明を得た（写真7）。当初は修行コースを巡る予定を立て



写真7 笠置寺で小林慶範長老から講話をいただく

歴史学の講義のように詳しく学術的だった。

（2017年5月28日、香川撮影）

ていたが、長老の説明が詳細な部分まで及んだため、次の訪問地との約束の関係で修行コース巡りを断念した。天候に恵まれていたので、修行コースを巡れなかったのは残念至極であり、もう少し余裕を持ったコース設計にしておけばよかったと後悔した。しかし、経済的な負担を考えると2日目は大学に到着してから昼食にすることが穏当であると考えたので、今回はこれが限界だったかもしれない。身体を動かしたかった者にとっては物足りなかったとの懸念も残るが、笠置寺長老による学究的な説明の深さは歴史好きの学生たちの琴線に触れたようである。笠置寺を辞し、我々は大型バスの待つ「わかさぎ温泉」(町営の天然温泉施設)まで宿舎のマイクロバスで2往復して下山した。大型バスで笠置を発ったのは9:35だった。

⑦ 浄瑠璃寺 笠置からの大型バスは、JR 加茂駅付近の道路が事前通行許可を得ていないと通過できなかった(コース立案時には不知であった)ため、やむなく国道 24 号線で木津川市中心市街地に出て、そこから木津南ニュータウンを経由して浄瑠璃寺に向かった。このように走行距離でロスを生じたが、道路混雑が無かったため浄瑠璃寺には 10:20 に到着した。境内には他の観光客もいたので全員揃っての行動は差し控え、バス駐車場での集合時間を告げて本堂入場後は自由行動とした。国宝や重要文化財を多く持つ南山城の名刹は、個人で公共交通を使って訪問するのが難しく、そういう観点からは合宿研修での訪問は価値があったと思われる。疲れを見せず楽しそうに過ごす学生の姿(写真 8)は引率者冥利に尽きる。ただ、浄瑠璃寺到着時点で体調不良を訴える女子学生が 1 名出たため、彼女には次の訪問地の木津南中学校も含めてバス車内で休んでもらった。我々は浄瑠璃寺を 11:15 に出発し、バス車中から木津南中学校に現在位置の報告をしつつ同校に向かった。

⑧ 木津南中学校 最後の訪問地には予定時刻より 5 分早く 11:25 に到着した。教頭の志賀 徹先生の案内で校舎内を巡り、吹き抜け 2 層になっている珍しい図書室の見学後は校内で自由周遊となった。長さ 100m の校舎内廊下、デザイン性に優れた大階段(写真 9)など、おおよそ公立学校の一般的意匠を逸脱した同校のユニークな構造は多くの学生の感心を得たようだ。前日に訪問した笠置小学校が小規模校であるのに対し、木津南中学校は山城教育局管内でも有数の大規模中学校であり、校種を違えるものの対照的な学校見学ができたことは教育学部の新入生合宿研修では意義深かったといえよう。このことが少しでも学生たちの教員就職への動機付けになれば幸いである。

以上の企画を終え、木津南中学校を辞したのが 12:05 だった。大学帰着後に各自で昼食という行程を組んだため、また校内で部活動に励んでいる生徒たちが多い日曜ということもあり、当初から見学時間は 30 ～ 40 分の予定であ



写真 8
浄瑠璃寺の三重塔の前で記念写真
青もみじの美しい葉色が瑞々し新入
生を際立たせた。
(2017年5月28日、香川撮影)



写真 9
木津南中学校を象徴する大階段
開放的で明るいデザインは公立学校とし
て秀逸なデザインだった。
(2017年5月26日、香川撮影)

った。その点では予定通りに学校見学を終えた。帰路は木津ICから城陽ICまで京奈和自動車道、その後は国道24号線を経由して13:00に大学に帰着した。バスの車中で2日間の新入生合宿研修に関する簡単なアンケート調査に答えてもらった。その内容を次章で紹介する。

Ⅳ. アンケート調査にみる新入生合宿研修の評価—むすびに代えて—

前章の章末に記したアンケート調査は、今後の新入生合宿研修を少しでも良い方向へ発展させていけるよう参加学生に回答を依頼したものである。回答は参加者全員から得られたので、回答総数は36を数える。無効回答は無かった。

アンケート調査の質問項目は、第Ⅱ章と第Ⅲ章で触れた①～⑧の訪問地・イベントの5段階評価(5:大変良かった, 4:良かった, 3:まあまあ, 2:良くなかった, 1:全く良くなかった)に加えて、新入生合宿研修の費用(今回は入学時事前集金の8,000円+追加集金500円)についての意見(選択式で一部記述式。5:多少は質を落しても6,000円くらいに値下げした方がよい, 3:料金・質ともに今回程度がちょうどよい, 1:料金を上げて質を高めた方がよい。このうち最後の選択肢を選んだ場合は妥当な金額を付記)、今回の訪問地・イベント①～⑧のトップ3を順に番号で回答、以上の10問を投げかけた。

上記の選択番号をそのまま得点として回答者数を乗じ、その合計値を回答人数の36で除して各項目の評価点を算出した。その結果についてまず訪問地・イベントに関する評価からみていくことにしよう。

訪問地・イベントについて評価点が高かったものから順に列記すると次のようになる。1位:福寿園CHA遊学パーク(4.5点, 小数点第二位を四捨五入, 以下の数値も同様)、2位:宿舎でのご当地クイズ(4.3点)、3位:国立国会図書館関西館(3.8点)、浄瑠璃寺(3.8点)、木津南中学校(3.8点)、6位:笠置小学校(3.6点)、7位:映画『笠置Rock!』特別上映会(3.4点)、8位:笠置寺(2.3点)。

笠置寺の得点が低かったのは、時間の都合でミニ修行ができなかったことが期待外れであったと推察される。また、総じて朝が弱い学生が増えているので、長老による詳しい説明が苦痛になった学生が居たのではとの懸念もある。当日の天候は極めて良かったので、仮にミニ修行ができていれば壮大な景観に感嘆して評価が大きく違っていただかもしれない。

他の訪問地・イベントについては、第1位と第2位が突出して高い評価を得ているが、これらが共に参加型の内容であることを踏まえると、新入生合宿研修では「見学や鑑賞よりも体験や参加」というのが学生たちの希望に適っているように思える。しかし、林間学校のようなイベントに終始すると「親睦だけ」ともなりかねないので、やはり何らかの学習の動機付けや地域色の盛り込みは大切ではないかと考える。

そうした意味では、国立国会図書館関西館、小中学校訪問(笠置小学校、木津南中学校)、名利拝観(浄瑠璃寺)や映画『笠置Rock!』鑑賞のすべてが評価点3.0の水準を上回ったことは、学生たちの向学心や地域理解への意欲が決して低くないことを傍証している。『笠置Rock!』については、プロの俳優がほとんど出演せず多数の町民が出演した映画なので、演技の完成度を通常の映画と比較するのは酷である。しかも劇場での上映ではないため、スクリーンや音響の環境も万

全ではなかった。さらに、笠置町への訪問経験をもつ新入生はほとんど居なかった。こうした厳しい条件の下での評価点 3.4 点は決して低くないとも考えられる。いずれにせよ今回は、劇場公開に先立って我々のために特別上映していただけたことに深く感謝したい。

続いて新入生合宿研修の費用負担についての意見をまとめてみる。評価点は 3.0 点で、「多少は質を落しても 6,000 円くらいに値下げした方が良い」と「料金を上げて質を高めた方が良い」は、ともに 6 件の回答を得ており、これらを除く 24 件は「料金・質ともに今回程度が丁度良い」だった。最後の回答をした者が記した妥当な金額(総額)は 10,000 円が 4 名、金額未記入が 2 名だった。この質問項目を総括すると、今回の費用である 8,500 円(入学時事前集金の 8,000 円+追加集金 500 円)は概ね妥当であったといえよう。ただ、コース設計をおこなう立場からすれば、入学時事前集金の 8,000 円の金額内で準備を進めるとなると、利用できる宿泊施設や研修内容がかなり限定的にならざるを得ない。このように考えると 10,000 円という事前集金額があれば、相応に自由度の高いコース設計が可能になると思われる。

最後に①～⑧の訪問地・イベントのうち、「最も良かった」(順位付け第 1 位)との回答が多く集まったものを一瞥したい。なお、順位付け第 2 位や第 3 位であったものについては紙幅の都合で割愛する。「最も良かった」との回答が多かったトップ 3 を順に列記すると、1 位: 宿舎でのご当地クイズ (16 件)、2 位: 福寿園 CHA 遊学パーク (12 件)、3 位: 国立国会図書館関西館 (6 件) となり、「最も良かった」という回答の 94.4% がトップ 3 に集中している。これらが「親睦的イベント」と「学びの動機付け」の間で拮抗していることは、今回の新入生合宿研修が概ね当初の目標を達成できたと判断してもよいだろう。

謝 辞

本稿に掲載した写真は、すべて関係者からの使用許諾を得ています。なお、今回の新入生合宿研修を実施するにあたり、国立国会図書館関西館文献提供課の依田紀久様をはじめとする同館職員のみなさま、福寿園 CHA 遊学パーク事業本部遊学部課長の秋山哲也様および同事業本部裏千家準教授の東 基子先生をはじめとする同パーク職員のみなさま、相楽東部広域連合立笠置小学校校長の岡田しげ子先生ならびに同校教頭の中熊貴史先生をはじめとする教職員のみなさま、笠置町企画観光課課長補佐の小林慶純様、映画『笠置 Rock!』監督の馬杉雅喜様、宿舎で利用させていただいた自遊宿・松本亭のみなさま、真言宗智山派鹿鷲山笠置寺の長老である小林慶範様、真言律宗小田原山浄瑠璃寺住職の佐伯功勝様、木津川市立木津南中学校校長の北澤義之先生および同校教頭の志賀 徹先生をはじめとする教職員のみなさま、我々一行を無事故で輸送いただいたバス会社のみなさま、様々な手続きでお力添えをいただいた本学学生課のみなさま、以上多くの方々から多大なご支援をいただきました。末筆ながら記して御礼申し上げます。

文 献

香川貴志・荻野 雄 (2012)「新入生合宿研修の設計と実践—2011 (平成 23) 年度 社会領域専攻の事例—」, 京都教育大学環境教育研究年報, **20**, pp. 161-174.

小松 実・中島 一・田上隆徳ほか (2014)「災害発生時を意識した新入生合宿研修の取り組み」,

- 論文集「高専教育」(阿南工業高等専門学校), **37**, pp.593-598.
- 鈴木智大(2009)「新入生合宿研修の運営を通じて」, 共通教育フォーラム(福井大学), **11**, p.7.
- 仲間正浩・上間陽子・西岡尚也ほか(2010)「琉球大学教育学部新入生合宿研修の実施の準備と結果について—2009 年の実施結果とアンケート集計—」, 教育実践総合センター紀要(琉球大学), **17**, pp.143-154.
- 福政 修(2012)「新入生合宿研修によせて—これからの高専教育—」, 電気設備学会誌, **32**(6), pp.433-434.
- 松永藤彦(2013)「新入生合宿研修報告: コミュニケーション活性化と食を通じたもの作り体験」, 東洋食品工業短期大学紀要, **2**, pp.25-29.
- 山村 豊・成家篤史(2013)「初年度教育における合宿研修の効果—平成 25 年度帝京大学初等教育学科初等教育コース新入生合宿研修の報告—」, 帝京大学教育学部紀要, **2**, pp.217-230.